
■古典ギリシャ期のルーラー・シップの概念

寄り道ついでに。古典ギリシャ期の「ルーラー・シップ」の概念も。古典ギリシア期とその後続く各時代の概念、そして現代のものとを比較すると。古典ギリシア期の占星術の概念は「一種独特な様相」を呈しているように思います。比較対照した時のその「違い」の中に、ヘレニズム文化の影響とかそれ以前のバビロニア期の名残りなど見え隠れするよううでいて。なんとも興味深く。自分は面白いなと思っています。

「古典ギリシャ期の占星術こそが唯一絶対！」と思い込んでる訳ではないのですが。個人的な好みでいうと、正直、自分好みであり。そそられるというか。親しみやすさを感じます。なので長くなるのを承知で。楽しんで寄り道してたりしてます。。（すみません）

さて。その古典ギリシャ期の占星術の特徴のうち、自分が「おお～♪」と思ったことのそのひとつが、「ルーラー・シップ」の考え方でした。

▼以下、例によって参照ページの該当箇所を。拙訳にて引用します。

「伝統占星術の解説書」ジョセフ・クレイン：著 ARHAT：刊
「A Practical Guide to Traditional Astrology」by JOSEPH CRAIN：ARHAT
P.1～P.2 第1章「伝統的な惑星のディグニティとディスポジション」より

●「ドミサイル・ルーラー（居住地の支配星）」、1ページから2ページ部分の抜粋

ヘレニズム時代には、サインの支配星を「oikodektor」といいました。oikoはハウスや住居に由来する言葉で、dektorは『責任を引き受ける』『責任を負う』という意味でした。これは支配dominationというより、管理責任の働きという意味合いを含んでいました。そのため、私たちが習慣的に使う「支配関係rulership」という言葉は、伝統的な占星術の観点から考えるなら不正確です。サインの支配星は、もっと正確には「ドミサイル・ルーラー-domicile ruler」とみなされ、王や皇帝の支配というニュアンスよりも、むしろ首相や管理職の長官chief operating officerのように働くという意味合いでした。

<P.2>

ギリシャ人によると、惑星がサインを「支配」することはできないからです。なぜなら黄道帯の軌道は常に一定であり、惑星はその軌道の周りをたえず移り変わるからです。古代人は、惑星よりも黄道帯の方に偉大な権限を与えました。その一方で惑星は、私たちの世界の変化と相互に影響を与えています。空に惑星がなければ、私たちにはほとんど何の意味もありません。「火星が牡羊を支配する」という言葉は、不正確です。変化する惑星が変化しないサインを支配することはできないからです。「牡羊が火星を支配する」と言うのも不正確です。その代わりに特定のチャートで牡羊がどのような行動をするのかを知りたいなら、牡羊のドミサイル・ルーラー（居住地の支配星）の火星の状態を調べることができます。

この中で。特になるほど～！と膝を打ったのが。「たえず変化する惑星が、変化しないサ

インを支配することはできない」という言葉でした。自分としては納得至極。12サインを「天の領分」と考えるならば。天と地の真ん中で動き回る「惑星」が、「天の家」を、そりゃ確かに支配はできなかつと。合点のいく気がしました。

この古典ギリシャ期の「ルーラー・シップ」の概念に添うなら。「蠍のサインを火星が支配する」という言葉をそのイメージ通りに「蠍宮殿を支配する火星王！」という大げさな表現はできないぞ、と。有りか無しかで言えば、「無し！」となる訳ですね。(^^)

このような古典ギリシャ期の概念や定義を知することは、たいそう面白いのです。コメント26の「12サイン」と「ハウス」について、でも触れたように。歴史上のある時期にはサインを惑星の「家」としていても。時代がくだるにつれ、いつしか地上の場所の方を「ハウス」と呼ぶようになったというように。概念や定義の時代による移り変わりをあらためて認識できるからです。

現在は「支配星」という言葉が一般的ですし、自分も普段は「ルーラー」と呼んでいます。ただし、ギリシャ期のこの定義を知ってからは。古典占星術関連の場などではサインの支配星を「ドミサイル・ルーラー」と呼び分けるようになりました。

「ドミサイル」という言葉に「強〜いこだわりがある！」という訳からではなく。品位を見る際、他の「エグザルト、デトリメント、フォール、トリプリシティ、ターム、フェイス」のルーラーと「ドミサイル（いわゆるサイン・ルーラー）」とを明確に呼び分けたいなと思ってのことです。

以上で脱線終了。次こそ「サインとアスペクト」の整理を、本題への復帰をと思います。

くりまる

2006年11月03日 03:45